

# 食べる・食べられる

僕は山形の月山中腹、標高八〇〇メートルほどの場所に暮らしている。月山周辺では毎年秋になるとたくさんのカメムシが発生し、刺激すると臭いオナラを出すために害虫として扱われている。僕はカメムシを見つけると瓶などに入れておいて、何匹か集まると調理して食べている……と言うと多くの人には怪訝な顔をされてしまう。近頃は食文化も見直されつつあるが、日本社会で暮らす者にとっては虫の中でもカメムシに対する忌避感（ひげん）は強いものがあるのだろう。しかし世界に目を向けてみればカメムシは多くの地域で食べられ、貴重なタンパク源となっている。

カメムシを食べるためには調理の手順が大切となる。虫を食べる際には安全のため火を通すのだが、カメムシの場合はまず生きたまま熱湯に入れてオナラを出してから揚げたり茹（ゆ）でたりして調理する。油で揚げ味付けしたカメムシは少しパクチャーのような香りがすることもあるがスナック菓子のようで美味しい。

また僕はカメムシ以外にもカエルやヘビ、季節ごとの山菜やキノコも食べる。要するに自然の中で食べられそうなものは何でも食べたいと思っている。

僕は山伏失格かもしれないけれど、神仏を熱

## 坂本大三郎

プロフィール  
1975年生まれ。山伏／美術作家／文筆家。千葉県出身。山伏との関連が考えられる芸術や芸能の発生や民間信仰、生活技術に関心をもち祭りや芸能、宗教思想の調査研究をおこなう。現在は山形・東北を拠点に自然と人とのかわりをテーマに執筆。さまざまな美術展に参加し作品を制作している。著作に『山伏と僕』（リトルモア）『山伏ノート』（技術評論社）など。

心にお祈りすれば良いことがあるとか、おこないが悪いとバチが当たるといったことは全然信じていない。しかし自然の中で生存させてもらっていると感じて、海や山や街など自分を取り囲んでいる世界に対して深い敬意を持っている。

僕が暮らしている山形では人が亡くなると魂が山に宿ると考える文化がまだ残されていて、実際、人は死んでから時間をかけて身体や、そこに蓄積されていたエネルギーが自然の中に拡散吸収されていく。そう考えれば自然というのは自分たちの祖先が姿を変えたものであり、いずれは自分も自然に食べられて、そこに加わるのだとも思えてくる。

すると自然の一部であるカメムシが愛おしく思えてこないだろうか。害虫だからといって簡単に殺し捨てる気持ちにはとてもなれない。虫や道路で轢かれた動物も痛んでいなければ食べたい。そう僕は思っている。

近頃は「カメムシを食べている」という噂だけが広まってしまい、僕を山の怪人のように思っている人もいるようなのだけれど、それはそれで子供の頃に抱いた「妖怪になりたい」という夢に一步步近づけたようで悪い気はしていない。……でもホントは少し寂しい。

## 月刊 みんなぱく

11月号日次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>食べる・食べられる</b><br/>坂本 大三郎</p> <p>2 モルグ街のオランウータン<br/>井上 健</p> <p>4 日本ミステリーの夜明け<br/>堀 啓子</p> <p>5 指紋は何の証拠?——犯罪人類学から科学捜査へ<br/>橋本 一径</p> <p>7 人類学者は名探偵か<br/>高橋 絵里香</p> <p>8 考古学ミステリーは情報工学で解けるか<br/>寺村 裕史</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/><b>ネパール地震の被災地を訪ねて</b><br/>南 真木人</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 味の根っこ<br/><b>チェブオハウ</b><br/>齋藤 玲子</p> <p>16 文化遺産おもてうら<br/><b>和食がユネスコの無形文化遺産に登録されて見えてきたこと</b><br/>熊倉 功夫</p> <p>18 音の居場所<br/><b>米国先住民ミュージシャン エド・カボーティ</b><br/>伊藤 敦規</p> <p>20 人間学のキーワード<br/><b>共生</b><br/>飯嶋 秀治</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|